文芸サロン作品集

2024年4月

シニアネット福岡

（SNF）

文芸愛好会

短　歌

宮　由枝

【伊藤　伝衛門邸　にて】

白蓮をしのべる庭の蕗の薹

ふうわり春を　待ちて日に向く

はかなげな写真の白蓮　書き残す

文いさましく　水茎うるはし

思ふまま生きし白蓮　展示さる

志那服細く　色褪せにつつ

【秋彼岸】

墓洗ふ木桶の音もこだまする

山峡冷ゆる　秋彼岸なり

青年となりにし孫を一目なり

君に見せたし墓　清めいて

冬川はネオン映して商ひの

屋台に灯ともす人の影あり

盛り場を寒行の僧　連なりて

編み笠揺らし　遠去りにけり

知らない・わからないとはいえ

山本　為三

向田邦子が書いている。対談をするとき、いつも決まった速記者がお見えになる。出版社が契約している人である。速記が仕事であるから速記者は対談中ひとことともしゃべらず対談が終わった時に失礼しますと小声であいさつされてお帰りになるだけである。

大人しく速記の仕事をまじめにされている。一見さえた人とは言いづらい風体の男性、でも実直そうで仕事は間違いなくこなされているようである。作家からみると速記者はあくまで手伝ってくれるスタッフ、上下関係でいえば、下に見る関係にある。

ある日、にわか雨にあわれて部屋でシャツを着替えておられた。見るとはなくちらっとその光景に出くわした。なんと筋肉隆々で胸毛がモジャモジャ、ボディビルでもされているのかなと、これまでの人物像は間違いだったと思い知らされたという。

後日、珍しくこの速記者と世間話をしたときこの方はカメラが趣味で新聞社などのコンクールに何度も入賞されていて玄人はだし、腕はプロ級だとわかった。

人相風体、職業、顔つき、しゃべり方など、見た目で一見〇〇風と決めつける。当たっていることもあるが大外れのこともある。対談者二人とちょっと距離をとって、ただ黙々と速記をされている遠慮がちな姿、つまり見た目と、ボディビルとかプロ並みの写真の腕前とは天地の違いがある。

見た目だけで人を判断しては間違うよ、である。

二十人ぐらいが同席した懇親会があった。場所は料理屋の座敷。食卓はロの字型。一分遅れで席についた。もうみんなが席についていた。目の前にえらく元気な男性がいてしゃべっている。片足を投げ出している。行儀の悪い姿。初顔合わせの懇親会、少しは礼儀をわきまえろよと言いたくなった。声が大きくよくしゃべる、人柄は明るいように見える。でもこちらに向けて投げ出した足は不愉快である。

その男性に呼び出し電話が料亭にかかってきた。男性は障子の影から杖を取り出した。杖を支えに男性はスッと立ち上がった。片足が義足だった。座敷で座るときには足を投げ出す格好になる。男性は杖をついてスタスタと部屋を出て行った。

義足のことを知らず一人不愉快になっていた。何も知らないままひとり合点で気をもんでいる。滑稽でさえある。

地下鉄の優先席に座った。三人席の端っこに女性が座っている。三十歳代に見える。年寄客が何人かそばに近づいたが女性は微動だにしない。こんな時優先席に座っている人がちょっと席を譲ろうとする動きか気配を見せれば目の前を通る年寄り客は座りやすいものである。三人席の真ん中が空いているのだから。

電車がターミナル駅についた。女性が立ち上がった。お腹が大きかった。妊婦である。服装からはわかりづらかった。こちら、まさに事情も知らず一人イライラしている。

お年寄りを見ておのれがスックと立てばよいのに自分は老人だもんね、と内心得意の自己弁護、恥ずかしかった。

電車の中。ドアー脇に赤ちゃんを抱いた女性が立っている。すぐそばの座席には男性が座っている。その場面だけを見ると座っている男性に非難の目が注がれる。が、そこには経過がある。女性は赤ちゃんを抱いて座席に座っていた。赤ちゃんがむずかった。お母さんは立ち上がる。立ってあやすと赤ちゃんは泣き止む。しばらくしてお母さんが座る。座ると赤ちゃんがまた泣く。立ってあやされると泣き止む。これを二、三回繰り返して席が空いたところに男性が乗ってきた。座ってもいいかと会釈的な挨拶をして座った。この男性は立ったり座ったりのお母さんのことを知らない。こちらはこの経過を目撃している。むずかる赤ちゃんをあやすのはむつかしいもんだと、座席のことなど考えずにこの光景の経過を見て知っている。しかしあとから電車に乗ってきて、お母さんのそばの空席に座った男性、この光景を見た人は、何だこの男性は、席を譲ればよいのにと、独り相撲をする。

物事には経過、いきさつ、拠って来るところというものがある。ひとを非難するとき、非難の目を向けるとき、早合点は禁止ですね。軽はずみ、ましてや付和雷同、いけませんねえ。

前を走る車が止まった。その前方に三台止まっている。どれかがクラクションを鳴らした。早く進めよというクラクション。足の不自由なお年寄りが車いすを押して横断していた。信号機のない横断歩道。車いすにはおばあさんが乗っていた。老々介護。先頭は大型トラック、後続車には車いすが見えない。何をしているんだと言わんばかりにクラクションを鳴らした車、これ無理もない、見なかったんだもの……。

たばこ

山本　為三

ヘヴィスモーカー、愛煙家……こんな言葉がありました。なつかしい。

たばこは吸うか飲むか。私は飲むという。どうやら昔からそういっていた。おおくのひとが吸うとおっしゃるし日本語としてどちらが正しいかとなるとそりゃ吸うでしょう。でもね、ときどき「飲む」という人いますよ。テレビで見ましたよ。なにかほっとします、私は。事実、週刊誌に「緊急特報　タバコ飲み必読の最新ガン自衛策」たばこ喫煙全盛期の一九六六年一〇月週刊現代の特集記事。

一八か一九かの未成年時。親父のたばこを盗み取った。たばこケースに七～八本あった時に抜き取った。しばらく隠し持ち、バレていないことを確認して、確認といってもオヤジに抜き取ったよと聞けるわけがない、口うるさい人が黙っているわけがない時間経過を見計らって、大丈夫という段階でバレていないと勝手に認定して二階の自分の部屋で一本に火をつけた。生まれて初めての喫煙体験。

目が回りだした。気分が悪くなった。立っておられない。床に転がった。天井が回りだした。かなり深く吸い込んだのだろう。反省はしなかった。金輪際たばこは飲まないとは思わなかった。これで大人になったというような感慨もなかった。ただただ苦しいだけでもがいていた。人に聞いたことはないが最初の一本目は皆さんどうでしたか。

思いっきり 肺に煙を送り込まなければ初体験は無事通過するだろう。飲み方としては失敗の巻でした。

そのせいかどうか、たばこは深く吸わないたばこ飲みになった。一日二十本か四十本の喫煙者。何度も禁煙宣言をした。簡単に禁煙をして簡単に喫煙復活。その繰り返し。喫煙時、高速道路の見晴らしの良いパーキングエリア

で車を止めて一服たばこを味わう。これが好きだった。仕事で一区切りついた時の一服、これもウエルカムでハッピー。何とも言えない解放感。

深く吸わないたばこ飲み。たばこは二，三服で灰皿行き。灰皿に灰を落としたことがない。たばこの先っちょに灰がくっついてその灰を灰皿に落とす、これは普通ののみ方。たばこを指でもって人差し指で軽くたたく。これをしたことがない。灰が落ちそうになるずっと前に灰皿に捨てる。吸い方は二，三服、しかも吸いかたが浅い、肺の奥深くまで煙が行っていないと思っている。これを自慢げに家族に言うと、バカじゃないの、そんな飲み方を自慢するより、たばこそのものをやめなさいよ、まったくもったいない話。……総反撃。本気の軽蔑の眼。

健康診断で喫煙の有無をたずねる。医師も一日何本ですかと聞いてくる。どういう吸い方ですか、深く吸い込みますかなどとは聞かない。まして二，三回浅く吸って捨てるか、根元までしっかり吸うかといった質問はしない。吸い方についての研究報告もないらしい。実際、チェーンスモーカーと言って根元近くまで吸ったところで、次の新しいタバコを取り出し火をつける連続二本喫煙者を見たことがある。たばこを根元まで吸う常習者、その指がニコチンとヤニで茶色に変色しているのを見たこともある。つまり、たばこと健康問題は喫煙の詳細な実態はあまり語られずにごく大雑把に「喫煙、それは健康に悪い」で片付けられている。

医者も科学者であるのなら喫煙の実態を厳密に研究してどんな吸い方、一日の本数だけでなく、どういう吸い方が健康に悪い影響があるのかを根拠づけるべきじゃないかな。禁煙がつらいのならつらさをがまんしてストレスを感じるより本数を減らしてリラックスした方が良い、こう言う医者もいました。

たばこを断って二五年、今や煙や匂いがチラリと来ただけであわてて逃げていく老人の姿、ニコチン臭い人とすれ違う時の不快感、いまさらなにをおっしゃる……。

ふりがな

山本　為三

漢字の話は微妙なところがある。なにが微妙か。話題として取り上げ方次第で自慢話になる。よく知っているねと感心されるより自慢げ、誇らしげに受け取られる危険がある。かと思えば、へえ、そんなことも知らなかったのと見下され、小ばかにされることがある。

漢字の話題は慎重に、まさにＴＰＯ、時と場合を用心深く、目配り気配り忘れずに、取扱注意の爆発物である。

それを承知でちょっと試食してみました。

覿面。これ、てきめんと読む。ふり仮名がつけてあった。
希う。これにもふり仮名あった。こいねがう、と読む。

ふり仮名、ありがたい助け舟。これがないと字が読めない。文章も小説も前に進まない。
口に出しことはある。つまりしゃべり言葉。日本語として知っている。ところが漢字にされると読めない。いわれてみれば意味は知っている。口に出して得意げにしゃべっている。日本人なのに日本語である漢字が読めないとは。

欠片：かけら、素振り：そぶり、烏滸がましい：おこがましい、狡い：こすい、ずるい
霍乱：かくらん、啜る：すする、禍禍しい：まがまがしい、踵：かかと、忝い：かたじけない

最近直面した漢字。読めなかったり間違って読んだりした漢字の数々。まだあるがちょっと面倒、いや恥ずかしいので遠慮します。

ごく最近、文章を読んでいて遭遇した言葉。ふり仮名をつけている場合もあるし、そのままの時もある。ふり仮名つきの時はありがとうと心の中でお礼を言うことにしている。

相手はその文章の筆者か、出版社、新聞社、雑誌社の編集者。この漢字はフリガナをつけると決めている場合もあろう。ふり仮名なしの場合はこの漢字は読めるだろうということかな。文章は読み手が読めてなんぼの話。読めな

い文章は世間に公表してもあまり意味がないと思うがいかが。新聞の俳句短歌にはフリガナがよくつけられている。

字に関心がある。けっこう強い関心。というより文章を読んでいて出くわした漢字で読めないとき一瞬たじろぐ。読めない自分が腹立たしい。読めないからたいてい意味も分からない。乏しい知識と頭で懸命に想像をめぐらす、文章の流れから大体こんな意味だろうかと。しかし読めなかった漢字がそのままあとに残ると何か消化不良感があり、あと味がいたって悪い。読めない上に意味も分からないまま通過する時も同じ読後感。文章を書いた側はこれは読めるだろうということもありこれを読めない読者は読めなくてもいいよと突き放す場合もあるだろう。

突き放されてもなお縋り付く人情噺ではないが、いつも電子辞書をそばにおいて文章を読んでいる。この辞書は広辞苑収蔵。読み方と意味はこれでわかるが当然百パーセントではない。ほかに二，三種類の辞書の応援がいる場合もある。

パソコン、スマホのせい（所為）で漢字が書けなくなったと嘆く人が多い。本当かな。もしも、これらの文明の機器が登場しなければちゃんと書けたのか、書けていたのかな。もともと漢字が苦手という人も機器登場で言い訳がしやすくなった……試験によく出題される漢字ばかりを覚えようとした。それ以外はからっきしアウト。そういうかたよった知識は欠陥商品。

スイスアルプスを歩く

新川　正　惠

三〇年前初めてのヨーロッパ旅行をした。フランス、イタリア、スイスの旅でした。

その旅でユングフラウに向かう山岳鐵道で眺めた光景が、長年心に刻む風景でした。いつかあのようにハイキングコースを歩きたいと思うようになっていた。

思いが叶い二〇一一年七月八泊九日で山友十人でスイスアルプスをハイキングするチヤンスが得られた。

ソール経由でスイス・チューリッヒへ、チューリッヒに一泊して特急列車でスイス髄一の山岳リゾート、マッターホルンの見える町ツエルマットに三連泊。

朝五時起きでマッターホルンの山頂部を照らし赤く焼けるモルゲンロートを見に出かけた。朱にそまるマッターホルンに多くの人が歓声を上げ数分間を共有し陶酔した。その後ホテルの近くを散策。街角でチロル衣装の十一人がスイスホルンを演奏していた。現地でスイスホルンのエーデルワイスを生演奏で目　の前で聞くことができた。

そのすぐ後、羊飼いの少年たちの列が。チロル地方衣装に角笛の映像に見るそのままであった。食事のあとツエルマットのハイキングコースを歩く。道は整備され夢のハイキングが始まった。名峰を眺めお花畑を楽しみながら、いろいろな国の方との出会いも楽しみの一つでした。

青紫林道に似たゲンチアン、ピンク色のつつじに似たアルペンローゼ、アルプスマーモットを遠くに見ることもできた。

カウベルを付けた顔のしろい牛が、のんびりとしてのどかなハイキングコースを一日中歩く。山のレストランでチーズフォンデュやチョコレートケーキの美味しかったこと。忘れられない。

ゴルナーグラート行きの登山電車に乗りローテンボーデンで降り、リッフエルゼーという小さな湖に行く。空が青く風のない湖面に映る美しい霊峰逆さマッターホルンの勇姿を見ることができた。

再び電車に乗りゴルナーグラート展望台へ、昨日眺めたモンテローザやりスカム孤高の巨人マッターホルンを前日より鮮明に眺めることができた。しばらく歩きスネガ展望台で、スーパーで買ったパンの昼食。スネガから三〇分程のところに、フインデルンという昔ながらの村を訪ねた。写真で見るそのままの街並みにウイスの暮らしを垣間見た。後トウフテンという小さなむら村まで、気持ちの良い山道を下る。

山中に小さくて素敵なレストランがあった。ザックを下ろしほっと一息ホットチョコレートにクッキー。ここでもマッターホルンが歓迎してくれた。

ミヤマキンバイに似た花が疲れを癒してくれた。カナダから来たという大学生に会い話をした。女性一人で一ヶ月トレッキングやハイキングをするとのこと。バックパックひとつで溌溂とし羨ましくみえた。

マウンテンバイクで勢いよく走る人も多く見かけた。日本ではまだあまり見ない光景だった。すり違う人はみな「ごきげんよう」とお国言葉で声をかけて通り過ぎる。嬉しい。

ホテルから一五分歩きロープウェイに乗りクラインマッターホルン展望台へ、その間四十分程。この展望台からはマッターホルンの南壁だけしか見えず、形は変わって見えるがより近く巨大に見えた。

何処までも続く目を見張る美しさ。大きくうねり流れる氷河。日本の山で見たそれとは比較にならない。

列車を乗り継ぎインターラーケンからアイガーの麓の村グリンデンワルドに到着。ユングフラウ三山と言われるアイガー、メンヒ、ユングフラウが見事に連なった景観は、すばらしかった。

ロープウェイでフィルスト展望台へ。

バッハルプゼー（標高２１６３ｍにある湖）を経由してファウルホルンまでのよく整備された三時間コースをハイキング。

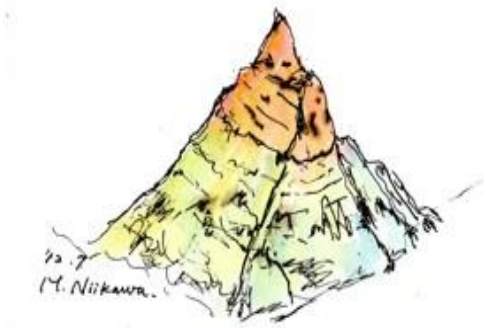
アルプス三大名花と言われるアルペンローゼ、エンチアン、キンポーゲに似た高山植物が、一面に咲いた美しいコースを天気に恵まれ時間を忘れて歩いた。

残念ながら自然に咲くエーデルワイスを見ることはできなかった。

仲間に恵まれたスイスの山旅、それでも、毎日の山歩きには疲労困憊。

登山電車、ロープウェイ、ゴンドラ、ケーブルカーの乗り放題を利用してのプランは熟知した山友のありてこそと大きな経験に感謝している。

遠い昔のことを思い出しアルバムをめくった。できる事ならもう一度と思わないではない。



令和六年（二〇二四年）の歌会始め入選作 十首紹介

手柴　正義

お題は「和」

【御　製】（天皇陛下がお詠みになった和歌）

「をちこちの旅路に会える人びとの笑顔を見れば心和みぬ」

【皇后陛下御歌】

「広島をはじめて訪（と）ひて平和への深き念（おも）ひを吾子（あこ）は綴れり」

【一般応募者の歌】一万五二七〇首の中から入選作の十首

①②は、私の共感度、お気に入りの二首

① 栃木県・古橋正好（８８歳）・元教育長

「己が手で漉きたる和紙の証書手に六年生は卒後となる」

○米カルフォニア州・川崎ハルコ（８１歳）・移民史研究家

「かの日々に移り来し人等耕しし大和（やまと）と呼ぶ里アマンドの花」

○神奈川県・臼杵善幸（７５歳）・無職

「呼びに来てくれる人を追い越して電話に急ぎし昭和の夜道」

○香川県・岩倉由枝（７２歳）・主婦

「和菓子屋をなりはひとして五十年寒紅梅に芯をさす朝」

② 埼玉県・高橋祐子（７１歳）・学校職員

「和だんすは母のぬくもり大島に袖をとほせば晩年に似る」

○福岡県・川添さとみ（６１歳）・元中学校教職員

「風琴の和音のように柔らかに多言語混じりあえる教室」

○千葉県・小野文香（６１歳）・主婦

「見逃がした小さな小さな違和感の粒で自分がつくられていく」

○石川県・宮村瑞穂（３２歳）・公務員

「花散里が一番好きと笑みし友和服の似合う母となりぬる」

○京都府・小池弘実（２１歳）・大学３年生

「目を瞑り一分間を祈るとき皆が小さき平和の像なり」

○新潟県・神田日陽里（１７歳）・高校２年生

「それいいね」付和雷同の私でもこの恋だけは自己主張する」

令和五年（二〇二三年）の歌会始め入選作 十首の紹介

今年のお題は「友」

手柴　正義

【御　製】

「コロナ禍に友と楽器を奏でうる喜び語る生徒らの笑み」

（陛下は、コロナ禍で活動を制約されながらも、友人と演奏できる喜びを語った高校の吹奏楽部員らと交流した際のうれしさを詠み、人々に早く日常生活が戻るようにとの願いを込められた）

【皇后陛下御歌】

「皇室に君と歩みし半生を見守りくれし親しき友ら」

【一般応募者の歌】一万五〇〇五首の中から入選作の十首

○ 岡山県・藤井正子

「温もりの残る手袋渡されて君は友より夫（をつと）となりぬ」

○ 熊本県・三浦清美

「卒論は梶井だったね君だけが四十二歳（じじふにさい）のままなる友よ」

○ 東京都・久和鏡子

「キスゲ咲く尾瀬の木道友の背のリズムで歩く少し離れて」

○ 新潟県・相川澄子

「友だちはゐないんだよと言う君の瞳の中にわたしを探す」

○ 神奈川県・岩田真治

「つくるでもできるでもなくそこにゐたあなたをわたしは友とよんでる」

③ 茨城県・芳山三喜雄

「ともだちを友人と呼ぶようになり子は就活をほどなく終へる」

① 島根県・添松友香

「母さんも友だちできた？」と小一の吾子（あこ）に問われし仕事の初日

○ 京都府・丹羽紗矢香

「友といふ言葉を知らぬ一歳が泣いてゐる子の頭を撫（な）でる」

○ 東京都・吉田直子

「みづいろの絵の具ばかりを借りにきた友の見てゐた空を知りたい」

○ 山梨県・小宮山碧生

「友の呼ぶ僕のあだ名はわるくない他のやつには呼ばせないけど」

蒙古襲来の地

三島　武

今年は、二〇二四年である。元寇の文永の役から七五〇年に当り、各地でイベントが行われている。

この報道を見る度に、伊都国の近くに住み、近くの遺跡に興味を持った中学生時代に、博多湾に面した今津海岸に自転車で出かけたことを思い出す。そこには、数本の松に囲まれて、蒙古塚と書かれただけの寂しい石碑が立っていた。

最近になって、このような蒙古塚が博多湾を囲む各地に建てられていることを知った。その直後、車で今津を通りかかった時、久しぶりに立ち寄ってみようと試みた。

五十数年の時の移りは、今津地区を福祉村と称するようになり、大きく様変わりしていた。やっとの思いで、野の花学園の敷地内に整備されて立っているのを見つけることができた。

年に一度モンゴル関係者も招いて、被害を被った地元の子孫達で慰霊祭が今も行われているという。

蒙古襲来の二五〇年ほど前に、この同じ地域で起こった大事件がある。我が国が最初に異国人から攻め込まれた「刀伊の入寇」である。西暦一〇一九年に、中国の女真族の一派とみられる海賊が、壱岐・対馬を襲い、更に怡土郡・志摩郡・早良郡を荒し、博多を襲った。

当時博多には警固所という防衛施設があり、この一帯の要衝であった。刀伊勢は警固所を焼こうとするものの、大宰府の長官藤原隆家と大蔵種材らによって撃退された。博多上陸に失敗した刀伊勢は、松浦・壱岐・対馬を更に荒らし、数百名（千三百名の記述も）もの壮年男女を拉致して撤退したという。

この事件は、藤原道長が我が世の春を謳歌していた平安時代中期に、起こっている。

今年のＮＨＫ大河ドラマ「光る君へ」の時代である。ドラマでこの事件が、どのように取り扱われるのか？　注目している。また、俳優の竜星涼が演ずる藤原隆家（藤原道長の甥）と柄本佑演ずる藤原道長との掛け合いが楽しみでもある。

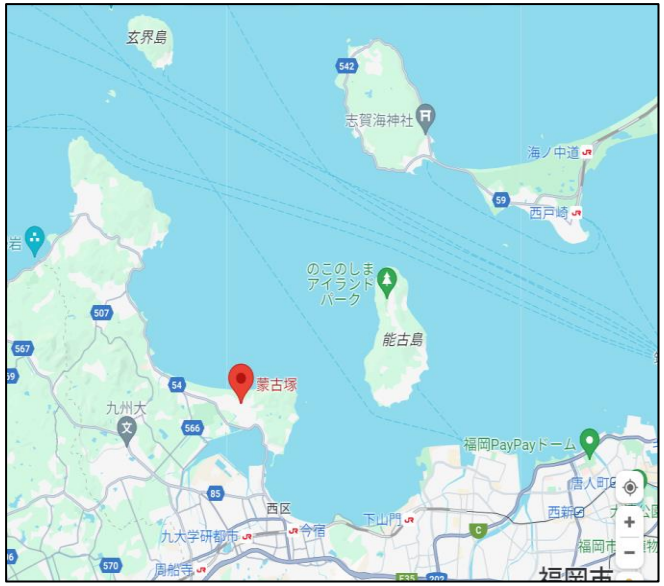
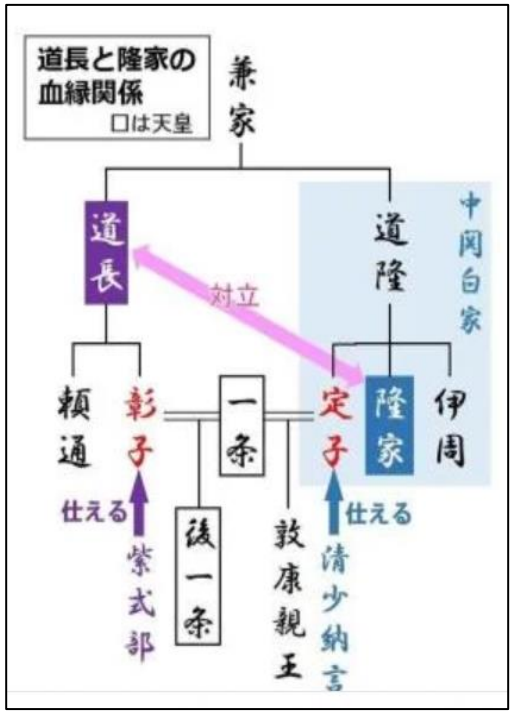
今年の正月三が日明けに、退屈しのぎも兼ねて、松浦市の鷹島へドライブした。

今も元寇当時の遺物が海中から発見されているという。大きな被害を受けた島なのに、それを逆手にとったモンゴル村というレジャーランドがあった。今津の蒙古塚での慰霊といい、鷹島のモンゴル村レジャーランドといい、痛ましい歴史を乗り越える日本人の慈悲深さ、心の優しさを、私は思い知った。

刀伊の入寇、蒙古襲来、この二つの歴史を学ぶとき、忘れてならないのは国を守る心構えの大切さである。

（二〇二四年二月）

今津蒙古塚



藤原隆家　家系図